国立研究開発法人
水産研究・教育機構

プレスリリース

平成２８年６月３０日
国立研究開発法人 水産研究・教育機構

平成２８年度 第２回瀬戸内海東部カタクチイワシ漁況予報

― 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
瀬戸内海区水産研究所がとりまとめた結果 ―

今後の見通し（平成28年7月～8月）のポイント

（1）概要：

シラスは大阪湾を除いて平年並みか下回る。カタクチイワシ（小羽から大羽）は前年を上回る。

（2）海域別：

紀伊水道東部のシラスは平年並みであった前年を下回る。

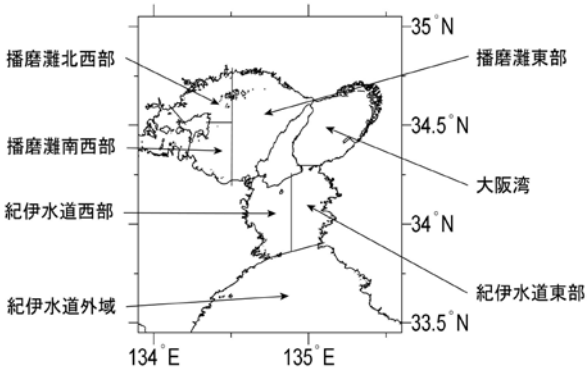
紀伊水道西部のシラスは不漁であった前年を上回るが、平年を下回る。

大阪湾のシラスは好漁であった前年並み。カタクチイワシは不漁であった前年を上回る。

播磨灘東部のシラスは不漁であった前年を下回る。

播磨灘南西部のシラスは前年同様、平年並み。

播磨灘北西部のシラスは好漁であった前年、平年を下回る。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所
担当：業務推進部　日向野、吉田
　　資源生産部　小畑、河野
電話：0829-55-3406、ファックス：0829-54-1216
当資料のホームページ掲載先URL
http://abchan.fra.go.jp/

平成28年度第2回瀬戸内海東部カタクチイワシ漁況予報

1. 今後の見通し（2016年7月～8月）

シラス（本年夏季発生群）

紀伊水道東部では平年並みであった前年を下回る。

紀伊水道西部では不漁であった前年を上回るが、平年を下回る。

大阪湾では好漁であった前年並み。

播磨灘東部では不漁であった前年を下回る。

播磨灘南西部では前年同様、平年並み。

播磨灘北西部では好漁であった前年、平年を下回る。

標本漁協、もしくは標本船のシラス漁獲量を各海域の指標とし（図1～図3）、特に断りがない場合、1986年～2015年の平均値を平年値とした。

カタクチイワシ（小羽から大羽）

大阪湾では不漁であった前年を上回る。

標本船の漁獲量を指標とし（図4）、1986年～2015年の平均値を平年値とした。

2. 漁況の経過（2016年4月～6月）及び今後の見通しについての説明

（1）シラス漁況

紀伊水道東部（和歌山県側）では5月の漁獲量は前年の98%、平年（2000年～2015年の平均値）の54%であった。6月中旬まで低調に推移している。

紀伊水道西部（徳島県側）では5月の漁獲量は前年の232%、平年（1997年～2015年の平均値）の77%であり、6月も低調である。

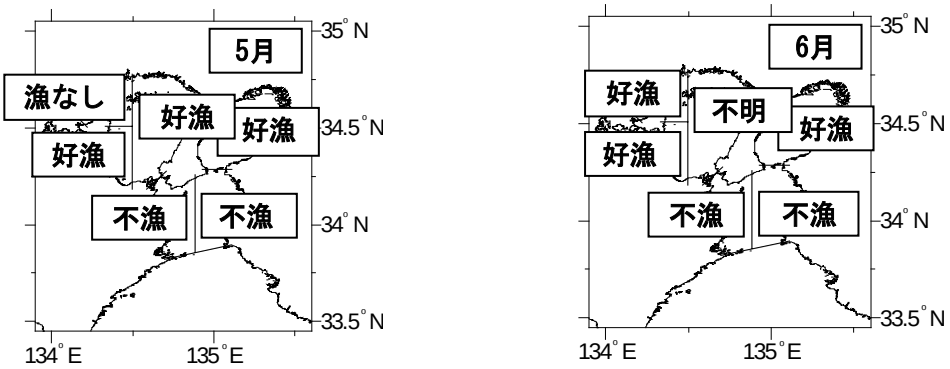
大阪湾（大阪府）では2016年の漁は前年同様、4月下旬から始まった。4月の漁獲量は前年の151%、平年の229%であった。6月上旬まで好調に推移した模様である。

大阪湾（兵庫県）では2016年の漁は前年より5日早い4月22日から始まった。5月の漁獲量は前年の129%、平年の161%であった。

播磨灘東部（兵庫県側）では2016年の漁は前年より4日早い5月21日から始まった。5月の漁獲量は前年の71%、平年の198%であった。

播磨灘南西部（香川県側）では2016年の漁は前年と同じ5月20日から始まった。6月中旬まで好調に推移している。

播磨灘北西部（岡山県側）では2016年の漁は前年より5日早い6月1日から始まった。6月の漁獲量は13日現在で前年の345%、2009年から2015年の平均値の232%である。



2016年5月～6月のシラス漁況

(2) 産卵量

紀伊水道外域の東側では5月は前年の83%、平年（2006～2015年の平均値）の13%であった。紀伊水道東部では5月は前年の3%、平年の5%であった。

大阪湾では5月は前年の171%、平年（1985～2014年の平均値）の249%、6月は前年の392%、平年の254%であった。

播磨灘では6月は前年の54%、平年の177%であった（図5）。播磨灘東部では6月は前年の137%、平年の308%、播磨灘南西部で前年の10%、平年の49%、播磨灘北西部で前年の5%、平年の19%であった。

(3) 今後の見通しの説明

シラス（本年夏季発生群）

6月15日現在、黒潮は都井岬沖、足摺岬沖でやや離岸、室戸岬、潮岬で接岸している。各岬における黒潮離岸距離の変動傾向と水産研究・教育機構運用の海況予測システムFRA-ROMSの予測結果を併せて考慮すると、紀伊水道沖の黒潮は8月まで一時的にやや離岸するものの、概ね、接岸傾向で推移すると予測される。

紀伊水道東部では外海発生群及び内海発生群が漁獲されていると推定される。紀伊水道外域の東側と紀伊水道東部での5月の産卵量は前年、平年を下回っており、平年並みであった前年を下回ると考えられる。

紀伊水道西部でも外海発生群及び内海発生群が漁獲されていると推定される。7月～8月の漁獲量は6月の紀伊水道西部と播磨灘（徳島県海域）の水温が低いほど多くなる傾向があり、播磨灘（徳島県海域）よりも紀伊水道の影響が大きい（図6）。紀伊水道西部に近接している播磨灘南西部での6月の産卵量は平年を下回っているが、紀伊水道西部の水温は前年よりもやや低い（前年値－1.0℃以上、-0.5℃未満）ことから、不漁であった前年を上回るが、平年を下回ると予測される。

大阪湾では外海発生群が春から引き続き漁獲されるのに加え、内海発生群が6月以降にシラスとして漁獲されるようになる。黒潮は接岸傾向で推移すると予測されているが、紀伊水道での漁獲量は減少傾向にあるので、今後の外海発生群の漁獲はあまり見込めない。しかし5月～6月の産卵量は前年、平年を上回っていることから、好漁であった前年並みと予測される。

播磨灘東部では内海発生群が漁の主体であり、6月の水温が低いほど7月～8月の漁獲量が多くなる傾向がある（図7）。また明瞭でないものの、播磨灘全体の6月の産卵量が多いほど7月～8月の漁獲量が多くなる傾向がある（図7）。播磨灘全体での6月の産卵量は平年を上回っているが（図5）、水温が前年並みで平年を上回っていることから、不漁であった前年を下回ると予測される（図8）。

播磨灘南西部も内海発生群が漁の主体である。5月～6月の漁は好調であるものの、6月の産卵量は前年、平年を下回り、仔魚採集量が平年並みであることから、前年同様、平年並みであると考えられる。

播磨灘北西部も内海発生群が漁の主体である。6月の漁は好調であるものの、産卵量は前年、平年を下回っていることから、好漁であった前年、平年を下回ると考えられる。

カタクチイワシ（小羽から大羽）

大阪湾では漁期当初に前年発生の 1 歳魚、その後は 2016 年の春シラス漁で漁獲の対象となった 0 歳魚が小・中羽として漁獲される。大阪湾における産卵量から判断すると大阪湾に滞留している 1 歳魚は前年より多いと考えられる。また 2016 年の春シラスの漁況をあわせて判断すると不漁であった前年を上回ると考えられる。

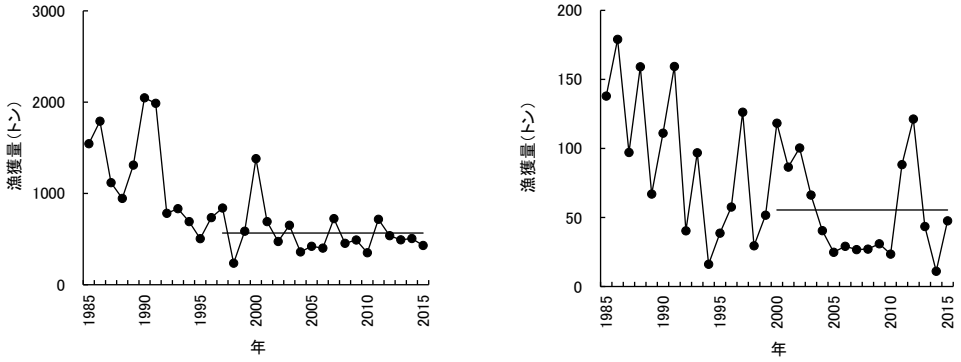


図1　紀伊水道西部（徳島県側：左図）及び紀伊水道東部（和歌山県側：右図）の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値、左図：1997年～2015年、右図：2000年～2015年）

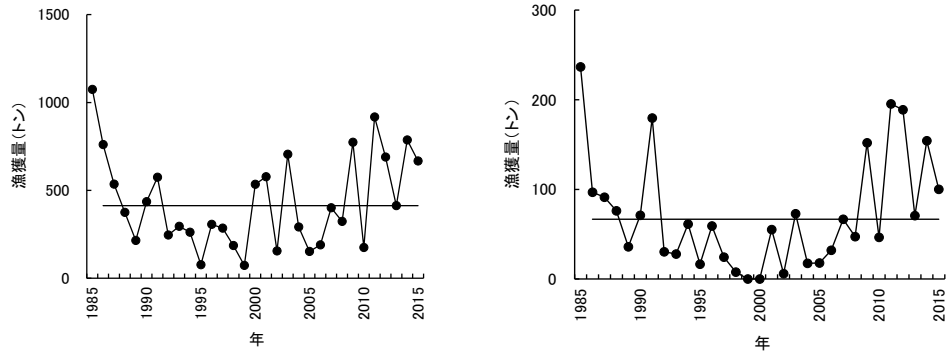


図2　大阪湾（兵庫県：左図、大阪府：右図）の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は1986年～2015年の平年値）

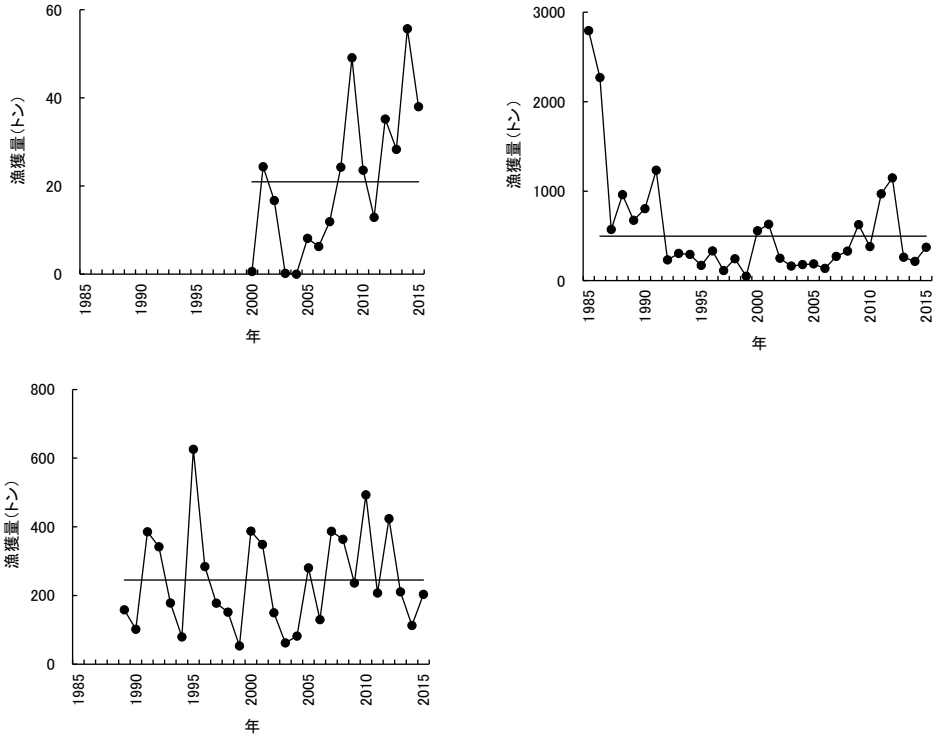


図3　播磨灘北西部（岡山県側：左上図）の標本船における7月～8月のシラス漁獲量、播磨灘東部（兵庫県側：右上図）、及び播磨灘南西部（香川県側：左下図）の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値、左上図：2000年から2015年、右上図：1986年から2015年、左下図：1989年から2015年）

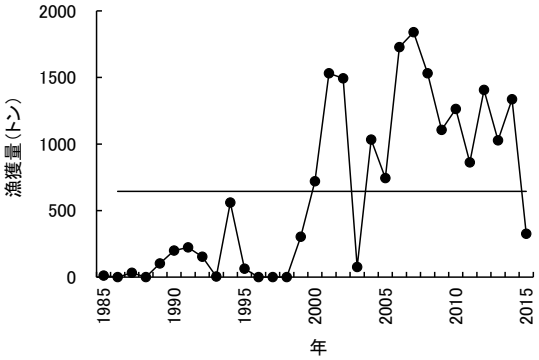


図4　大阪湾の標本船における7月～8月のカタクチイワシ漁獲量（実線は1986年～2015年の平年値）

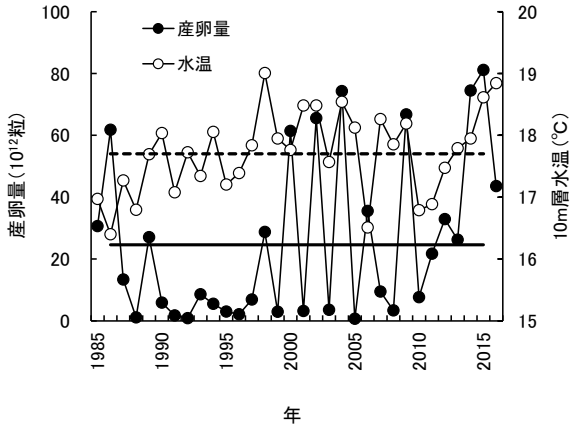


図5　播磨灘における6月の産卵量と10m層水温（実線は産卵量、点線は10m層水温の1986年～2015年の平年値）

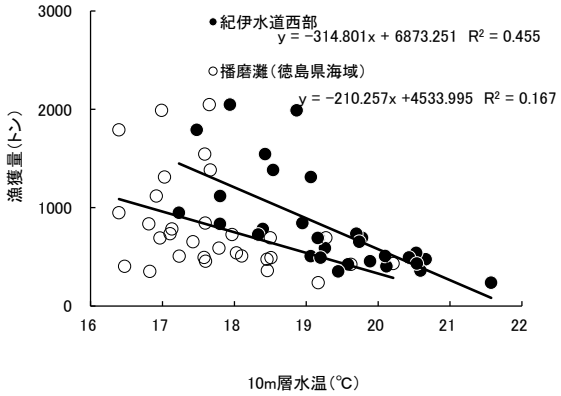
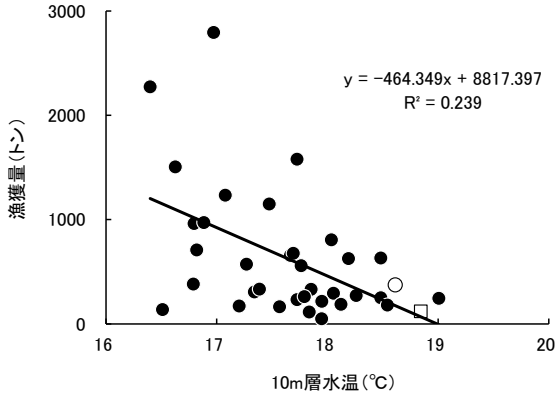


図6　紀伊水道西部・播磨灘（徳島県海域）における6月の10m層水温と紀伊水道西部の標本漁協におけるシラス漁獲量の関係



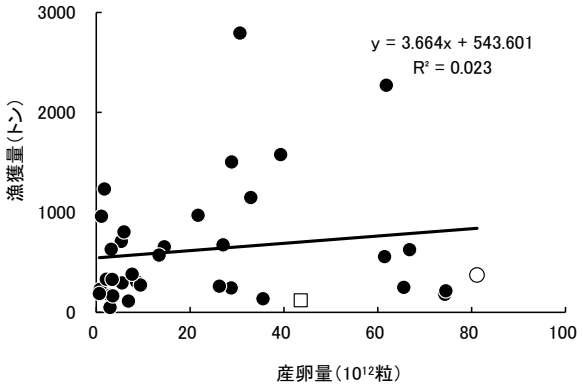


図7　播磨灘における6月の10m層水温と播磨灘東部における標本漁協のシラス漁獲量の関係（左図）及び6月の産卵量と標本漁協のシラス漁獲量の関係（右図）
使用したデータは1981年～2015年、○は2015年漁獲量、□は2016年予測値（2016年予測値は産卵量と水温をパラメータとした重回帰分析から求めているため、必ずしも両図の回帰直線上にない）

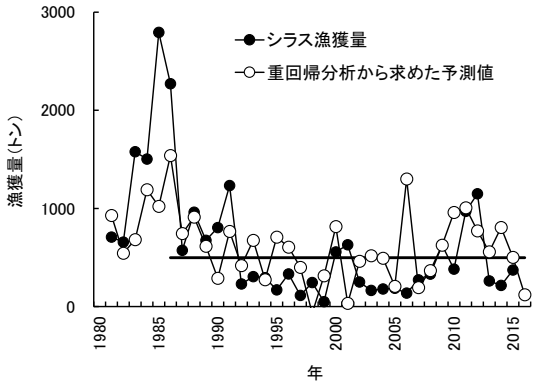


図8　播磨灘東部の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量と重回帰分析から求めた漁獲量予測値（実線は1986年～2015年の平年値）

参　画　機　関

和歌山県水産試験場 地方独立行政法人　大阪府立環境農林水産総合研究所 水産技術センター 兵庫県立農林水産技術総合センター 水産技術センター 岡山県農林水産総合センター水産研究所 香川県水産試験場	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 中央水産研究所 （取りまとめ機関） 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所